

スンナ派とイスラーム主義の系譜

森山央朗

(同志社大学准教授)

中東地域に関する昨今の報道は、「宗派対立」と「イスラーム過激派」に満ちている。シリアの内戦やイランとサウジアラビアの対立などは、スンナ派とシーア派というイスラーム内部の宗派の違いに根ざしたものと説明され、「イスラーム国 (al-Dawla al-Islāmīya/Islamic State; IS)」など、「イスラーム的」であることを標榜して過激な武装闘争と暴力的な支配を志向する集団が起こす蛮行のニュースを聞かない日は少ない。

こうした報道の姿勢に対して、中東地域の政治や歴史などの研究者の多くは批判的である。他の地域における紛争と同様に、中東地域における紛争も、様々な政治的・経済的利益や社会的・文化的要素が絡んだものであり、そうした複雑な紛争の要因を「宗派」に還元し、錯綜する紛争の現実を「宗派対立」として本質化することは、現実の理解に寄与しないからである。その一方で、中東地域の紛争当事者が、様々な形で「宗派」に言及しているのは事実である。敵対勢力を「宗派主義」と批判するにしても、支持者の宗派的な感情に訴えて「宗派動員」を試みるにしてもである。「宗派」は紛争の一要素に過ぎないものの、「宗派」が紛争に何らかの形で関与していることは否定できないのである。

また、「イスラーム国」などの「イスラーム過激派」は、しばしば「本来のイスラーム」から逸脱した暴力集団であると解説されるが、彼らの「過激なイスラーム」と「本来のイスラーム」がどのように異なり、どのような関係にあるのかは十分に論じられていない。世界のムスリム (イスラーム教徒) の大勢が、「イスラーム過激派」のイスラーム理解と蛮行を嫌悪する一方で、少数とはいえ無視できない数のムスリムが、「イスラーム過激派」の主張や行動を「本来のイスラーム」と認め、共感と支持を寄せていることも看過するべきではない。

こうした現実を考えれば、イスラームにおける「宗派」の展開と、近代において「イスラームに則った社会と国家」を唱えた思想と運動、すなわち「イスラーム主義」の形成を分析し、「イスラーム過激派」をその中に位置づけることは、中東の現状とその背景を考察するために必須の作業と言えよう。

以上の認識に基づき、西暦7世紀中葉から11世紀にかけての宗派の形成と、18世紀までにスンナ派内部に見られた思想・運動の系譜を整理し、その系譜の上に、19世紀以降のスンナ派イスラーム主義の展開を位置づけた結果、以下の2点が浮かび上がった。すなわち、(1)

サラフィー主義などの用語・概念が、様々な思想・運動の潮流によって、時に正反対の志向を表現するものとして用いられてきたことであり、(2) 教義や思想がムスリムの現実の行動を規定してきたのではなく、彼らを取り巻く現実と、その現実に対する彼らの認識が、教義や思想を形成してきたことである。

(1) の用語・概念の多義性については、イスラームにおいては、教会のような教義や概念の統一を図る組織・制度が存在せず、宗教的な議論が自由に展開されることに起因している。制度的権威によって用語・概念の定義と使用が統制されないために、「サラフィー主義」といった、イスラーム的に「善」な雰囲気強く帯びた用語・概念は、様々な思想・運動の表象として用いられたのである。

ウラマーやイスラーム主義の思想家たちは、そうした自由な状況の中で、様々な思想・運動を提唱し、支持を求めて競い合ってきた。そして、多くの支持を獲得した思想・運動が、正統的な地位を占めていったのである。こうした歴史的視点に立てば、固定的な「本来のイスラーム」なるものは存在しないのである。ムスリムたちがイスラームに求める需要、つまり、現状の意義づけや救済の希望といったものをより良く満たすと、多くのムスリムが見なした思想・運動が「本来のイスラーム」のようなものとなっていったのである。ここから、(2) のそれぞれの時代・地域においてムスリムたちを取り巻く現実と、その現実に対する彼らの認識が、イスラームの思想・運動を規定したことが明らかになるのである。

この宗派の教義やイスラーム主義の思想が現実を規定してきたのではなく、現実が教義と思想を規定してきたという認識は、宗派やイスラーム主義の思想・運動が現実に対して影響力を持たないことを意味するものではない。教義や思想は、信徒の現状認識を方向付け、それに従った現実の運動に動員する力を持つからである。特に、宗教の教義・思想が現実の紛争に影響した場合、信仰という要素を導入することで、政治的・経済的利害に基づいた交渉を困難にし、対立構造を固定化してしまうことは警戒しなければならないであろう。

現在、「イスラーム国」の下で蛮行を繰り返している人々に、「思想」と呼ぶに値する体系的な考えがあるようには見受けられないが、インターネットなどに流されている大時代的で大仰で滑稽にも見えてしまう宣伝に、無視できない数の人々が共感を寄せていることは軽視すべきでない。「イスラーム国」の宣伝と行動は、抑圧されているとの現状認識を強く持つ人々の需要を満たしているのである。今後、イラクやシリアにおける「イスラーム国」の支配領域が既成事実化するようなことになれば、それに見合った思想・教義を調べ、より多くの人々を惹きつける運動に発展する可能性も否定できない。

そうした事態を防ぐ根本的な解決は、イラクとシリアにおける「イスラーム国」の支配を軍事的に破壊することではない。根本的な解決は、「イスラーム過激派」に対する需要が発生する状況、つまり、少なくないムスリムが軍事的・政治的・経済的に抑圧されていると認識せざるを得ない現状を改善することである。また、抑圧されているという認識が現状批判的な思想を生み、実際に抑圧されている現実がその思想に対する支持を広げて過激な運動を促し、その結果、更に抑圧が強まり、更に過激な思想・運動が発生するという負の連鎖を断ち切らなければならない。

そのためには、ムスリムの様々な思想・教義・運動を丹念に読み解き、彼らの現状認識を正確に把握すると共に、政治や経済の面で、ムスリムがムスリムであるが故に抑圧されている感じる現実を改善していくことが求められる。日本を含めた国際社会は、これらの地味で困難で時間のかかる作業を堅実に続けていくべきであり、場当たりの軍事介入は、ムスリムたちの被抑圧感を強めることで、かえって「イスラーム過激派」の影響力を強めてしまうことが懸念される。「イスラーム過激派」の問題を解決し、イスラーム諸国が国際社会において建設的な貢献を果たしていくためには、ムスリムの大勢が、国際的・国内的に公正に扱われている、少なくとも、抑圧されていないと感じられるだけの現実が確保されることが不可欠と考えられるのである。